

# 西洋の拡張と土地の命名（2）

## —命名パターンの変容と継続—

井上幸孝\*

### 目次

1. 問題の所在
2. 西洋の拡張の歴史的経緯
3. コロンの第1回航海における命名行為
4. スペイン植民地における「新しい」を伴う地名
5. 非イベリア諸国の進出過程における「新しい」の継承（以上、前稿）
6. 「新しい」の変容
7. スペイン植民地末期フィリピンにおける町村の命名
8. まとめと今後の課題（以上、本稿）

### 6. 「新しい」の変容

前稿<sup>1)</sup>で見た通り、「新しい」という形容詞を伴う地名の命名方法は、16世紀前半に始まり、スペイン領の拡大過程のみならず、その他の西欧諸国のアメリカ大陸進出においても用いられた。「ヌエバ・エスパーニャ（新しいスペイン）」に端を発するこの命名方法は、ヨーロッパ諸国の海外進出において文字通り新しいモデルとして機能した。同時に存在し得る旧地名と新地名、支配する側である前者と被支配地たる後者の関係性といった

---

\*専修大学文学部教授

意味合いがこの命名方法の背後には見え隠れする。

しかしながら、「新しい〇〇」という命名方法の実践は、常にヨーロッパの既存地名に基づくというわけではなかった。やがて、既に「発見」済みの地名に「新しい」という形容詞を付した新地名が見られるようになる。本節ではスペイン領ヌエバ・エスパーニャ（メキシコ市を中心とする副王領）の拡大過程を中心にいくつかの実例を見ることで、「新しい〇〇」という命名パターンの変容を考察することとしたい。

#### ①ヌエボ・メヒコ（ニュー・メキシコ）

非ヨーロッパの地名に「新しい」という形容詞を付加した地名として16世紀中に見られる事例は二つある。その一つは、アメリカ大陸のもので、現アメリカ合衆国の州名となっているニュー・メキシコ（スペイン語ではヌエボ・メヒコ）である<sup>2)</sup>。この地域へのスペインの進出は、既に見た通り、ヌエバ・エスパーニャの北へ向けての拡大の結果によるものであった。北方の伝説的な場所である「シボラ」を見つけ出そうという試みが早くからあり、やがて1581年にアグスティン・ロドリゲスとファン・サンチェス・サムスカードが布教に赴き、1595年にはファン・デ・オニャーテが同地に派遣された（Levin Rojo 2014: 61；Maas 1915: 3-5）。

1598年にスペイン人がヌエバ・ビスカヤの北側に設置した「王国」は、ヌエボ・メヒコ（Nuevo México）と名づけられ、北側の境界は曖昧で時代とともに変動したものの、スペインによる支配はおよそ2世紀間続いた（Gerhard 1996: 389）。さらにこの名称は1821年にメキシコがスペインから独立した後も引き続き使用された。同年の11月17日に公布された法令によれば、新たに誕生したメキシコ国家を構成する21の地方の一つにヌエボ・メヒコが含まれている（O’Gorman 1994: 43-44）。19世紀半ばの米墨戦争を経て、ヌエボ・メヒコはアメリカ合衆国領となったが、その英訳であるニュー・メキシコという地名が現在まで州名として使用され続けている。

言うまでもなく、ヌエボ・メヒコという地名は、16世紀前半にスペイン人が征服したメキシコ(メヒコ)に「新しい」という形容詞が付されたものである。元来、メキシコという地名は、アステカ時代の都市(メシーコ=テノチティトラン Mexico-Tenochtitlan, メシーコ=トラテロルコ Mexico-Tlatelolco)の「メシーコ」というナワトル語の地名に由来する。そして、征服後はヌエバ・エスパーニャ副王領の中心都市(メキシコ市, Ciudad de México)の名称として使用されていた<sup>3)</sup>。

メキシコの歴史学者レビン・ロホは、1581年に布教活動に赴いた修道士たちがヌエボ・メヒコの名称を最初に使ったとしているが、この「新しいメキシコ」なる命名の経緯は判然としない。スペイン人が名づけたというのは確かであろうが、その経緯で先住民の概念が影響した可能性も無視できない(Levin Rojo 2014: 61, 191)。また、これらの修道士たちよりも後にフランシスコ会によって派遣され1583年に報告書を作成したアントニオ・デ・エスペホは、「ヌエバ・アンダルシア(Nueva Andalucía)」と呼ぶことを提案したが、この呼称は定着しなかった(Levin Rojo 2014: 80)。

後述のトラスカラの例に見られるように、メキシコ中央部征服後のスペイン人の探検・征服活動には、既に支配下に収めた地域の先住民が同行した。近年のメキシコ史研究では、インディオの中にもスペイン人と同様に征服する側となった者たちがいたことが着目されている(Matthew and Oudijk 2007)。ヌエボ・メヒコという新地名の命名に際してナワトル語の「ヤンクイク・メシーコ」<sup>4)</sup>の概念が何らかの影響を及ぼした可能性も考慮しておく必要があるだろう。

## ②ヌエバ・ギネア(ニュー・ギニア)

既存の「発見地」の名に「新しい」という形容詞を付加するという命名方法は、アメリカ大陸以外の場所でも起こった。むしろ、現在の地理的認識に基づいてアメリカ大陸に閉じた議論をすることは、当時の歴史的文脈

を考えれば不適切とすら言えるかもしれない。スペインの海外領がアメリカ大陸にとどまるものではないことは、フィリピンがスペイン領インディアスの一部を成したことからも明白である。16世紀後半のスペインの地誌官フアン・ロペス・デ・ベラスコによれば、スペイン領インディアスは「北インディアス」（現在の北中米）、「南インディアス」（現在の南米）、「西インディアス」（太平洋に沿ってアメリカ大陸の西方に広がると想定された地域）に三分されていた（Buschmann 2014: 19-20）。アメリカ大陸とアジアの間に広がる太平洋は「スペインの湖」、すなわちスペインが領有すべきものと認識されていた<sup>5)</sup>。それゆえ、太平洋の島々やそれに沿った諸地域は、少なくともある時点まではスペイン人の認識の中ではアメリカ大陸と明確に区別されるものではなかったと言える。

上述のヌエボ・メヒコよりも早い段階で既存の「発見地」に「新しい」の表現が付加されて名づけられたのがニュー・ギニア（スペイン語でヌエバ・ギネア Nueva Guinea）である。環太平洋の一部を成すニュー・ギニア（現パプア・ニューギニアおよびインドネシアにまたがる島）もまた、スペインの探検の結果としてこのように命名された。言うまでもなく、その名の由来となったギニアは、もともと15世紀半ばにアフリカ西岸の探検航海を進めた際にポルトガル人が「発見」し、領有を宣言した場所（現ギニアビサウ）の名称であった。

17世紀以降、ニュー・ギニアの地理的形状が次第に明らかになり、オランダやイギリスなどが進出して実際に支配を確立するのは19世紀と遅かったものの、この島やその近辺の探検は16世紀の段階からなされていた。1526年にはポルトガルが送り込んだメネセスが後にニュー・ギニアと呼ばれることになる陸塊を目にしている。スペインは、マガリャンイスによる初めての太平洋横断以降、アメリカ大陸から西へ向かっての探検・航海を何度も試みた。その経緯で、フィリピーナス（フィリピン）諸島を命名したロペス・デ・ビジャロボスは、1542年にニュー・ギニアにも立ち寄って

おり、住民の肌の色や髪の毛の形状がギニアの住民に似ていると考えたことから、同地をヌエバ・ギネアと名づけた(Suárez 1999: 168; 2004: 51)。管見が及ぶ限り、大航海時代の開始以降に非ヨーロッパの地名に「新しい」という形容詞が付けられたのは、この地名が最初である。時期的に見て、この命名方法が始まったのは、「ヌエバ・エスパーニャ(新しいスペイン)」のようにヨーロッパの既存地名に「新しい」を冠する命名方法よりも後であったと言える。

### ③ヌエバ・トラスカラ

次に見るのは、メキシコ中央部の先住民がヌエバ・エスパーニャ北部の入植に携わり、その結果として先住民語地名に「新しい」が付加された地名が見られた事例である。アステカ征服戦争(メキシコの戦争)において、コルテス率いるスペイン軍にトラスカラ人が協力したことはよく知られている。トラスカラはメキシコ市の東約120kmに位置し、征服以前はいわゆるアステカ王国(テノチティトラン、テツココ、トラコパンの三都市同盟の支配)に従属せず、独立した政体を維持していた<sup>6)</sup>。1521年のアステカ征服後、スペイン人の遠征隊にトラスカラ人が同行することも多かったが、チチメカ戦争(1540~1590年代)を経たメキシコ北部およびアメリカ合衆国南西部への入植過程でトラスカラ人はとりわけ重要な役割を果たした。

1591年、副王との協約に基づき、トラスカラ人400家族(932人)が北部の「チチメカ地方」への入植を開始した(Cavazos Garza 1999: 7; Martínez Saldaña 1998: 159-165; Montejano y Aguñaga 1999: 80)。彼らが最初に入植した入植地は6か所あった。そのうちの一つはサン・エステバン・デ・ヌエバ・トラスカラ(San Esteban de Nueva Tlaxcala)、さらにもう一つは、アスンシオン・トラスカリージャ(Asunción Tlaxcalilla)と呼ばれた(Fernández y Román 1999: 25)。前者は、「新トラスカラの聖ステファ

ノ」を意味し、「新トラスカラの」という形をとっていることから、実際にそう呼ばれた地方はなかったものの、ここでのヌエバ・トラスカラは地方名に準じたものと解釈しうる。他方、後者のトラスカリージャは「小トラスカラ」を意味する<sup>7)</sup>。

その後もヌエボ・レオンやさらに北に向かってヌエバ・エスパーニャ副王領が拡大する中でトラスカラ人は大きな役割を果たした。この過程でもトラスカラに関連する地名が見られる。1686年には現モンテレイ郊外に当たる場所にヌエストラ・セニョーラ・デ・サン・フアン・デ・トラスカラ (Nuestra Señora de San Juan de Tlaxcala) という村が建設され、一度放棄されたものの、18世紀初頭には再建されてサン・アントニオ・デ・ラ・ヌエバ・トラスカラ (San Antonio de la Nueva Tlaxcala) と改名されている (Cavazos Garza 1999: 9)。1715年には同じくモンテレイ近郊にヌエストラ・セニョーラ・デ・グアダルーペという名の布教村が創設されるが、数十年後には廃れており、1756年に再整備された際、ヌエバ・トラスカラ・デ・ヌエストラ・セニョーラ・デ・グアダルーペ・イ・オルカシータス (Nueva Tlaxcala de Nuestra Señora de Guadalupe y Horcasitas)<sup>8)</sup> と再命名されている (Cavazos Garza 1999: 11)。この最後の例では、町村の名称に「新しい (ヌエバ)」の表現が使用されているが、前稿で指摘した通り、地域名ではなく町村名にこの命名方法が採られた例で、命名方法としては主流ではなかった。

#### ④ヌエバス・フィリピーナス

ヌエバス・フィリピーナス (Nuevas Filipinas) もまた非ヨーロッパの地名に「新しい」という形容詞が付加された例である。既に述べた通り、フィリピーナス (フィリピンの西語名) は、ミゲル・ロペス・デ・レガスピによる1565年のセブ創設、1571年のマニラ創設を経て、ヌエバ・エスパーニャ副王領の一部としてスペインの植民地となったが、フィリピーナス

の呼称が与えられたのは、それよりも前の1540年代のことであった。これらの島々は当時の皇太子(後のフェリペ2世)の名に因んでフィリピーナスと命名されていた。

このフィリピーナスもまた、「新しい」という形容詞と共にやがて用いられることとなった。これまでに筆者が確認できた限りでは、2つの異なる事例にそれが見られる。一つは、東南アジア島嶼部および太平洋諸島の地理的知識の拡大によるものである。フィリピン諸島の近隣の島々についての情報が明らかになった結果、これらの島々の中には、現在のフィリピン共和国に含まれない島々も「フィリピーナス」の範疇に統合されていた。マガリャンイスの航海の段階で命名されたサン・ラサロ諸島という名称が使用されることもあった一方、レガスピ以降のスペイン支配の確立に伴い、スペインの領有下もしくはコントロールの下にある島々はフィリピーナスと呼ばれるようになっていった。

17世紀後半になるとフィリピンの東側の海域の探検が進んだ。1528年以降知られてはいたものの長らく放置されてきたカロリン諸島の探検が行われ、当時のスペイン国王カルロス2世の名に因んで「カロリーナス諸島」と名づけられた(Elizalde 2001: 316)。この間、スペイン支配がある程度及んでいるフィリピンを外れた東側の諸島は漠然とヌエバス・フィリピーナスと呼ばれていたようである。カロリーナス諸島が命名された後の17世紀前半の複数の地図にもヌエバス・フィリピーナスの呼称が見られる(Suárez 1999: 33; 2004: 184-185)。情報が十分ではないため現段階で安易に結論づけることは難しいが、当面、「新しい」には従来の呼称(フィリピーナス)をより拡大した地理的範囲、もしくはそれに隣接する新たな地域に用いられたケースがあるということは確認できる。

ヌエバス・フィリピーナスの呼称が用いられたもう一つの事例は、フィリピンから遠く離れた北米大陸におけるもので、現在のアメリカ合衆国の州名となっているテキサス(スペイン語では「テハス Texas」)の別名と

して史料に現れる。テキサスのメキシコ湾沿いには1519年にフロリダ探検の過程で探検隊が通過したり、1528年にアルバル・ヌニェス・カベサ・デ・バカらが立ち寄りしたが、17世紀末に至るまで散発的な探検や布教活動しかなされていなかった。1685年にフランスのロベール・カヴリエ・ド・ラ・サールが200名近い植民者を引き連れて到来したのを契機として、スペイン側もコアウィラを拠点として1687～90年に植民活動を開始させた。その後、スペインはフランスとの駆け引きをしながら1710年代以降にこの地域の植民地化を進めることになる。1722年までテキサスはコアウィラに付属する領土とされたが、1739年からはスペイン本国で任命された人物が派遣され、統治を担うことになった（Gerhard 1996: 416-418）。この際の正式名称が「新フィリピーナス王国（Nuevo Reino de las Filipinas）」もしくは「ヌエバス・フィリピーナス」であった。

上述の通り、東南アジアの「フィリピーナス」は、命名当時の王子（後のスペイン王フェリペ2世、在位1556～98年）に因んだ命名であった。それに対して、ここでの「ヌエバス・フィリピーナス」は当時のスペイン王フェリペ5世（在位1700～24年）の名に基づいていたと思われる。フランスがルイジアナの探検を進めた時期と重なることから、フランス王に因んだ地名であるルイジアナに対抗してヌエバス・フィリピーナスの命名がなされた可能性も考えられる。とはいえ、この地域はそれ以前の17世紀段階からテハスの名で既にスペイン人の間で知られており（Morfi 2010: 11）、結局のところ、ヌエバス・フィリピーナスの呼称は定着しなかった<sup>9)</sup>。1821年のメキシコ独立時にはメキシコを構成する21の地方の一つの名称としては、テハスが使用されている（O’Gorman 1994: 43）。その後は、周知の通り、同地方は1836年に独立した共和国（テキサス共和国）となり、1845年にアメリカ合衆国に編入されて28番目の州となって以降もこの名称が引き継がれていった。



## ⑤ヌエバ・カリフォルニア

カリフォルニアは、アルタ・カリフォルニア（上カリフォルニア、アメリカ合衆国カリフォルニア州側）とバハ・カリフォルニア（下カリフォルニア、メキシコ合衆国バハ・カリフォルニア州およびバハ・カリフォルニア・スール州側）にかけて広がる地域を指す。カリフォルニアへの探検は、早い段階に開始された。アステカ王国の征服から間もない1530年代にはコルテス自身が参加したものを含めてバハ・カリフォルニアの探検が行われ、1540年代にはファン・ロドリゲス・カプリージョが初めてアルタ・カリフォルニア沿岸を探検している（Gerhard 1996: 358-361）。カリフォルニアという名称が与えられたのはこの時期で、その由来は、ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボが『アマデイス・デ・ガウラ』の続編として著した騎士道物語に登場する地名というのが19世紀後半以来の通説であるが、詳細な経緯には不明な点も多い（Levin Rojo 2014: 97-98）。また、16世紀後半にはフランシス・ドレークがニュー・アルビオン<sup>10</sup>と名づけ、一時はその名も地図に記載された（Clavijero 2007: 75）。

しかしながら、カリフォルニアの植民地化が本格化するのはずっと先のことで、その正確な地理的形狀の把握にすら長い時間がかかった。実際、17世紀になってもカリフォルニアが島なのか半島なのかは不明なままであった（Clavijero 2007: xii）。さらに時代が下り、18世紀半ばになってスペイン王はカリフォルニアが島ではないと宣言したものの、その数年後の地図にも「カリフォルニア島」が描かれ続けていた（Depuydt y Jongbloet 2004: 72-75）。

アルタ・カリフォルニアにおいて本格的なスペイン人の侵入と布教が進んだのは18世紀後半以降のことであった。1769年に探検隊が派遣され、その後徐々に拠点や布教村の建設が進み、スペイン支配はサン・フランシスコ湾にまで及ぶようになる。アンティグア・カリフォルニア（旧カリフォルニア）に対して、ヌエバ・カリフォルニア（新カリフォルニア）という

名称が使われ始めたのはちょうどこの時期であった (Gerhard 1996: 378-380)。このように、既存のカリフォルニア (アンティグア・カリフォルニア) に対し、さらに遠方に隣接する地域がヌエバ・カリフォルニアと名づけられたというのは、上述のヌエバス・フィリピーナスの1つめに似た命名方法と言える。ただし、フィリピンのケースとの違いは、先に名づけられた地名に「旧 (古い)」を添えるか否かにある。アンティグア・カリフォルニアの表現は広く使用されたのに対し、アンティグアス・フィリピーナス (Antiguas Filipinas) やビエハス・フィリピーナス (Viejas Filipinas)<sup>11)</sup> のような表現は一般にはなされなかったようである。

以上の5つの事例は、いずれもヨーロッパの外部においてヨーロッパ人が予め「発見」した土地の名称に「新しい」という形容詞を加えた地名である。既存のヨーロッパの地名に「新しい」という形容詞を冠するのが当初見られた命名方法であったが、その用法が変化し、ヨーロッパ以外の地名にも「新しい」を付すようになるという経緯があったことがわかる。

また、これらの事例から、非ヨーロッパの地名に「新しい」を付すパターンには少なくとも2種類あったことが指摘される。一つは、東南アジア～太平洋におけるヌエバス・フィリピーナスやヌエバ・カリフォルニアの例に見られるように、「発見地」から連続した地域に「新しい」を付けてさらなる地理的広がりを命名する場合である。もう一つは、ヌエバ・ギネアやヌエボ・メヒコのように、連続した地理的空間ではなく、地理的・概念的に離れた場所を「新しい○○」と呼んだ場合である<sup>12)</sup>。その一方で、ヌエバ・トラスカラのように先住民が関与した事例や、北米大陸におけるヌエバス・フィリピーナスのような事例については、例外的な命名なのかそれとも他に同様の名づけ方の例があったのか今後さらに検討の余地がある。

## 7. スペイン植民地末期フィリピンにおける町村の命名

前項で指摘した通り、ヌエバ・エスパーニャの各地方名には「新しい」が頻出する一方、その中心都市（ヌエバ・ガリシアのコンポステラおよびグアダラハラ、ヌエボ・レオンのモンテレイ、ミチョアカンのバジャドリー、オアハカのアンテケラ、ユカタンのメリダなど<sup>13)</sup>）については、スペインに実在する既存の都市や町の名称をそのまま使用する傾向にあった。本節では、既存の都市や町の名をそのまま複製するパターンがスペイン植民地で長く続いたことを示す事例を見ておきたい。

18世紀後半にアメリカ合衆国はイギリスからの独立を果たし、19世紀前半にはメキシコやペルーなど現在のラテンアメリカ諸国の多くがスペインからの独立を達成した。しかし、スペイン領の中には1898年の米西戦争までスペインの植民地であり続けた地域もあった。キューバやプエルトリコと同様に19世紀末までスペイン領であり続けた主要地域の一つがフィリピンである。

18世紀後半から19世紀半ばにかけて、様々な状況の変化からこのスペイン植民地は変容を迫られた。七年戦争ではイギリスにより一時的に（1762～64年）マニラが占領された。この出来事により、スペインはフィリピンの統治体制を再建し、王立フィリピン会社を設立して植民地経済の開発に取り組んだ。また、1821年のメキシコ独立によってガレオン貿易は機能を停止したが、スペインは1834年にマニラを正式に開港し、その後、1860年までにイロイロやセブなども同様に開港した（白石2000：75-78）。こうした状況下で、スペイン王室は植民地を固守するために、税制・教育制度・治安の強化などを進めていくことになる（寺見2001：323）。

経済の活性化と人口増加が進んだこの時期、セブ管轄区における新地名がどのようなものだったのかの一端をここでは見ることにする。一般に、

スペイン支配下のフィリピンでは、住民はプエブロ（村）と呼ばれる単位に統合された。そのプエブロとは、フィリピンの住民が元来有していた小規模な集団（バラングイ）が一定地域ごとに統合されたものであった。通常、プエブロは教区と領域面で一致していたが、人口の希薄な地域などでは一つの教区に複数のプエブロが含まれることもあった（池端2001: 222-225）。

現段階で筆者が調査しているのは、主に19世紀半ば以降のセブ管轄区に関する一次史料である。これらの史料には、行政村を新たに立ち上げるケースと教区を新たに立ち上げるケースが見られ、新名称はしばしばスペイン語のものであった。これまでに筆者が調査した史料の情報をまとめたのが表1である。

特徴として、分離前の村の名称は現地語であるのに対し、この時期に新設された村の名称は基本的にスペイン語である点が見てとられる。これは当局が先住民語の紛らわしい名称を避け、スペイン語の名称を用いることを意図していたためと考えられる。例えば、アレグリアの分村に関する文書によれば、この村はトゥブラン（Tuburan）を名乗ろうとしたが別の村と同じ名前の地区があった。これを理由に、セブの総督は「上記の混乱を解決すべく、上述のトゥブランの村には半島〔筆者注：イベリア半島〕のいずれかの町村の名称を与えるのが適切であろうと考える」との指示を出し、その結果決められたのがアレグリアという名称であった<sup>14)</sup>。

この事例に見られるように、当時の命名にはスペイン国内の既存の町村名を使用したケースが多い。表1のうち、コルドバ、トレド、コンポステラ、サンタンデルはいずれも有名なイベリア半島の都市名である。ロンダとメデジンも同様にイベリア半島に既存の町村名であった。その一方、イベリア半島のアストゥリアスは地域名であるが、ここでは新設の村の名称として使用されている。また、ヌエバ・カセレスに関しては、イベリア半島に存在するカセレスという村の名称に「新しい（ヌエバ）」を追加する

表1： スペイン語の地名が採用されたセブ管区の新村落・教区名

名称	分離前の所属 村落名	区分	年号*	史料
アレグリア Alegria	マラブヨク Malabayoc	行政村	1850	Erección de los pueblos, Cebú, 1831-1894, exp. 3, exp. 4.
ボルボン Borbón	ソゴド Sogod	行政村・ 教区	1861	Erección de los pueblos, Cebú, 1831-1894, exp. 8.
コルドバ Córdoba	オボン Opon	行政村・ 教区	1863	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 5.
トレド Toledo	ギヌラナン Guinulanan	教区	1863	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 8.
コンポステラ Compostela	ダナオ Dánao	行政村・ 教区	1863	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 11.
ロンダ Ronda	ドゥマンフグ Dumanjug	行政村・ 教区	1871	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 18.
ヌエバ・カセレス Nueva Cáceres	ボルホーン Boljoon	教区	1876	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 24.
アストゥリアス Asturias	バランバン Balamban および トゥブラン Tuburan	行政村・ 教区	1878, 1879, 1885	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 26. Erección de los pueblos, Cebú, 1831-1894, exp. 11, exp.16, exp. 18.
メデジン Medellín	ダアン・バンタヤ ン Daan Bantayan	行政村	1879, 1880, 1885	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 27, exp. 32. Erección de los pueblos, Cebú?, 1831-1894, exp. 14, exp. 17, exp. 19.
サン・イシドロ San Isidro	バリリ Barili	行政村・ 教区	1892	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 47.
サンタンデル Santander	オスロブ Oslob	教区	1897	Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897, exp. 50.

\*年号は実際に分離独立した年ではなく、史料そのものの年号。

形で命名されている。また、サン・イシドロ（聖イシドールスのスペイン語形）は聖人名である。

実際には大量の文書があるため、ここで示した村名・教区名は全体のごく一部に過ぎない。とはいえ、基本的な命名パターンとして、既存の町の名を植民地にそのまま適応する（イベリア半島のコルドバに基づいてセブ島のコルドバを命名する）という方法が、19世紀後半になってもスペイン植民地では続いたことは確認できる。しかもこうして与えられた名称は現

在に至るまで多くがフィリピン国内において使用され続けている。

## 8. まとめと今後の課題

前稿と本稿では、1492年以降、西欧諸国が世界各地に探検・征服によって拡大していく経緯において、どのように「発見地」が命名されたのかに着目し、スペインの海外進出の過程における事例を中心にしながら命名パターンの全体像を仮説的に示そうとした。前稿では、大航海時代以降の西欧諸国の海外進出の経緯を概観した上で、コロンの第1回航海における地名の命名パターンを大きく4種に分類して提示し、さらには第5のパターンである「新しい」という形容詞を伴う地名があることを見た。その際、町の名称には「新しい」を伴わない命名方法が主流であったのに対し、地方や地域の名称には「新しい」を伴う地名が多く見られ、スペインに続いてアメリカ大陸に進出した西欧諸国もこのパターンを踏襲した点を指摘した。さらに、本稿では、「新しい」という形容詞を伴う地名に関して、ヨーロッパの既存の地名のみならず、西欧人にとっての「発見地」の名称にさらに「新しい」という形容詞が付加されるケースがあることを見た。その際、「新しい+非ヨーロッパの地名」の中にも複数の異なるタイプがあると考えられることを指摘した。また、スペイン植民地時代末期のフィリピンのセブを例として、ヨーロッパの既存の都市や町の名がそのまま植民地内に「複製」されるパターンが19世紀後半に至るまで存続したことを見た。

ベネディクト・アンダーソンは、『創造の共同体——ナショナリズムの流行と起源』の第二版で追加された付論において、「新しい」を伴う地名に言及し、「新」と「旧」が同時代的に理解され、並行して存在し得る状況が1500～1800年の、とりわけアメリカ大陸において成立していた点を指摘し、この大陸からナショナリズムが現れてきたことの背景として位置づ

けた(アンダーソン1997: 312-314)。このこと自体に異論はないが、「新しい」地を名づけていったのは、後世のクリオーリョというよりも、あくまで探検・航海の当時の「発見者側」がその主体であり、その名づけ方には「新しい○○」以外にも様々なパターンが存在した。ここまで考察してきたように、その命名パターンのうちいくつものがコロンの航海の段階に見られ、メキシコ征服期の「新しい」の登場で主要な命名パターンが出そろう。その後、スペイン以外の国々の進出過程でもこれらのパターンは繰り返され、18~19世紀においても、一方が他方を領有・支配するという力関係の上に地名が名づけられ続けたのであった。

前稿の冒頭にも述べたように、15世紀から19世紀という長い時間幅、アメリカ大陸のみならず太平洋やそれを取り囲む諸地域という広大な空間に及ぶことから、現段階での本研究では十分に考慮されていない点も多い。今後の課題としては、各事例の詳細を明らかにし、命名方法の継続や変化の過程をより具体的に明らかにすることが必要である。とりわけヌエバ・エスパーニャの北への拡大経緯はさらなる検討を要する。ヌエバ・エスパーニャ北部の各地域に「新しい」という形容詞を伴う名称が多くつけられたことは前稿と本稿で指摘したが、各地の征服および入植の経緯は極めて複雑である。これら地域の歴史研究の文献や一次史料は膨大に出版されており、それらを地道に押さえていくことで、どのような地名が現れ、それらが定着したり消えて行ったりしたのかをより細かに見ていくことが必要と考える。

他方、人物名に因んだ命名もさらなる検討を要する。本国の王や王族の名をもとにした命名がなされた点は確認したが、時代が下るとそれ以外の人物に基づいた命名も見られるようになる。18世紀にクックが命名したサンドウィッチ諸島(ハワイ諸島)や、同じく18世紀のアマト島(タヒチのスペイン側での名称)は貴族や副王の名に因む<sup>15)</sup>。さらには、航海士など「発見者」自身の名が反映された地名も現在まで多く残っており、本国の

人物名に因んだ命名方法から発見者の名に因んだ命名方法へと変容していった過程を掘り下げて考察する必要もあるだろう<sup>16)</sup>。

また、これ以外にも地名の命名パターンとしてさらに考慮すべき点が多く残されている。その最たるものは、命名方法として現地語の名称が採用される事例が多く存在したことである。いわゆるアンティール諸島の時代においても地元の地名が踏襲されることがあった。コロンがフアナ島と名づけた島が、結局はクーバ島<sup>17)</sup>の名で呼ばれることとなったのはその典型的な例である。このように、既存の先住民語地名がそのまま残されることになった例は、アメリカ大陸の二大文明圏であったメソアメリカとアンデスでとりわけ数多く見られる。とはいえ、現地語に基づいた名称が必ずしも現地での既存の地名とは限らず、そこに「発見者」側の取捨選択が入り込んでいることも多い点に留意する必要があるだろう。具体的には、既存地名がスペイン語化したケース<sup>18)</sup>、当該地域とは異なる地域の先住民語地名が付けられたケース<sup>19)</sup>、先住民語に由来するものの元々地名ではない名称がスペイン人の判断や誤解で地名として定着したケース<sup>20)</sup>などがある。これらを西欧人による命名の範疇に含めるか否かについても具体的に事例を掘り下げることを今後の検討課題としたい。

#### 謝辞：

本論文は、平成25～27年度 JSPS 科研費（挑戦的萌芽研究）「東西交流史の新たな視角：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」（研究課題番号25570006、代表：大阪大学・宮原暁）、平成26年度専修大学研究助成共同研究「『新たな土地』の命名と認識方法に関する研究」（代表：黒沢真里子）、平成28年度専修大学研究助成個人研究「スペイン植民地における地名の命名：メキシコとフィリピンの比較研究」の研究成果の一部である。

本年5月に逝去された林屋永吉・元スペイン大使に本稿を捧げます。同元大使は、コロンの航海誌の翻訳をはじめ本研究に欠かせない多くの研究業績を残されたのみならず、晩年には本稿の著者との間で学術的対話と個人的交流の機会を度々設けてくださいました。心より感謝し、ご冥福をお祈りします。



## 注

- 1) 井上幸孝「西洋の拡張と土地の命名(1)——コロンの第1回航海と「新しい」の系譜」,『専修人文論集』第97号, 197~224頁, 2015年11月。
- 2) ニュー・メキシコの名称は現在の州名まで引き継がれているものの, その地理的範囲は必ずしも同一ではない。なお, 以降のテキサスやカリフォルニアの事例もこれと同様である。
- 3) 現在でも, メキシコ国内では首都(メキシコ市)を指して単に「メヒコ」と呼ぶことが一般的である。
- 4) ナワトル語の「ヤンクイク・メシーコ Yancuic Mexico」は, スペイン語に直訳すれば「ヌエボ・メヒコ Nuevo México」となるが, yancuic は「元の(オリジナルの)」とも解することもできる。
- 5) 1494年のトルデシーヤス条約の分界線の西側に位置することから, 太平洋はスペインの主権下にあるとスペイン王室は見なした。その後, 1529年のサラゴサ条約によって, 太平洋の西側の領域が確定されることになる。
- 6) 現在のトラスカラ(トラスカラ州の州都トラスカラ・デ・シコテンカトル)は, スペイン征服後に建設された町で, 元々は4つの首長領(ティサトラン, オコテルコ, キアウイストラ, テベティクパク)から成る連合体であったとされる。
- 7) 示小辞を追加して新たな地名を作るというのも, 時折見られた命名方法だった。ベネズエラ(Venezuela, スペイン語 Venecia に示小辞 -uela を付加した形)はその代表例である。ただし, ナワトル語の地名にもこれに似たパターンが存在する。メシカルツインコ(Mexicaltzinco, 現在の発音では Mexicaltzingo)やメシカルトンコ(Mexicaltonco, 現在では Mexicaltongo)のように, 尊敬の接辞(-tzin)やスペイン語の示小辞と同様に「小さな」を意味する接辞(-ton)の入った地名はその例である。
- 8) 「ヌエストラ・セニョーラ・デ・グアダルーベ」はグアダルーベの聖母, 「オルカシータス」は当時のヌエバ・エスパーニャ副王レビジャヒヘド伯の名(フアン・フランシスコ・デ・グエメス・イ・オルカシータス)に因む。
- 9) テハスという地名は同地の先住民集団の名称に由来する(Morfi 2010: 52-53)。
- 10) アルビオン(Albion)はブリテン島の古名で, 同島の別称として用いられる。
- 11) スペイン語の antiguo(女性複数形は antiguas)および viejo(女性複数形は viejas)はいずれも「古い」を意味する形容詞である。
- 12) 「メキシコ」と「新しいメキシコ」は同じヌエバ・エスパーニャ領内であるため完全に隔離されているとは言い難いが, ニエボ・レオン, ニエバ・ガリシア等と名づけられた地域が間にあることを勘案すれば, 概念的には離れたものであると見なす方が適当と考える。
- 13) ミチョアカンのバジャドリャ(Valladolid)は現在の州都モレリア, オアハカのアンテケラ(Antequera)は現在の州都オアハカ・デ・フアレスである。
- 14) NAP, Erección de los pueblos, Cebú, 1831-1894, exp. 4, fs. 49r, 50r.

- 15) よく知られているように、サンドウィッチの名称はジェームズ・クックの航海を支えたサンドウィッチ伯ジョン・モンタギューに因んでクックが名づけたものである。他方、アマト島は第31代ペルー副王の姓を島名として名づけられたものであるが、これをイギリスは「ジョージ3世島」、フランスは「ヌーヴェル・シテール」と呼んでいた (Buschmann 2014: 87-88, 110, 117)
- 16) ここで言及した以外に別途考慮する必要があるのはニュー・オーリンズであろう。18世紀にフランス領の都市名として命名されたヌーヴェル・オルレアン (Nouvelle Orléans) は、町の名として「新しい」という形容詞が使用され、かつオルレアンは元々は地名だが、命名時点では家系 (オルレアン家) もしくは人物の称号 (オルレアン公) であった。
- 17) クーバ (Cuba) の英語読みがキューバである。
- 18) スペイン語風やスペイン語で発音しやすいよう語形が変化した地名としては、メキシコのクエルナバカ (Cuernavaca, 元のナワトル語名はクアウナワク Cuauhnhuac), イスカル・デ・マタモロス (Izúcar de Matamoros, 元のナワトル語名はイツォカン Itzocan) など多くの例が存在する。
- 19) 1521年のアステカ王国征服後、メキシコ中央部の先住民 (ナワトル語話者) がスペイン人に同行し、メキシコ南部や中米に遠征して以降、ナワトル語の地名が多く残ることになった。グアテマラ (Guatemala, ナワトル語ではクアウテマラン Cuauhtemallan) がその典型例である。
- 20) ユカタン (Yucatán) やペルー (Pirú, Birú) はその典型的な例とされる。

#### 未公刊史料

National Archives of the Philippines (NAP):

Erección de los pueblos, Cebú, 1796-1897. Exp. 5, 8, 11, 18, 24, 26, 27, 32, 47, 50.

Erección de los pueblos, Cebú, 1831-1894. Exp. 3, 4, 8, 11, 14, 16, 17, 18, 19.

#### 参考文献

(欧文)

Buschmann, Rainer F., *Iberian Visions of the Pacific Ocean, 1507-1899*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2014.

Cavazos Garza, Israel, “Los tlaxcaltecas en la colonización de Nuevo León”, en *Constructores de la nación. La migración tlaxcalteca en el norte de la Nueva España*, María Isabel Monroy Castillo (presentación), s.l.: El Colegio de San Luis, Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1999, pp. 7-15.

Clavijero, Francisco Xavier, “Historia de la Antigua o Baja California”, en *Historia de la Antigua o Baja California / Vida de Fray Junípero Serra y misiones de la California Septentrional*, estudios preliminares de Miguel León-Portilla, México: Porrúa (“Sepan

- cuantos...”, 143), 2007.
- Depuydt, Joost, e Ingeborg Jongbloet, *Mapas antiguas de México*. México: Fondo de Cultura Económica, Universiteit Antwerpen, 2004.
- Elizalde, María Dolores, “Una defensa de la soberanía en el contexto del imperialismo: La colonización española de las Islas Carolinas y Palaos”, en *Imperios y naciones en el Pacífico. Vol. II: Colonialismo e identidad nacional en Filipinas y Micronesia*, María Dolores Elizalde, Josep M. Fradera y Luis Alonso (eds.), Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 2001, pp. 315-339.
- Fernández, Rodolfo y José Francisco Román, “Presencia tlaxcalteca en Nueva Galicia”, en *Constructores de la nación. La migración tlaxcalteca en el norte de la Nueva España*, María Isabel Monroy Castillo (presentación), s.l.: El Colegio de San Luis, Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1999, pp. 17-33.
- Gerhard, Peter, *La frontera norte de la Nueva España*. México: Universidad Nacional Autónoma de México, 1996.
- Levin Rojo, Danna A., *Return to Aztlan: Indians, Spaniards and the Invention of Nuevo México*, Norman: University of Oklahoma Press, 2014.
- Maas, Otto, *Viajes de misioneros franciscanos á la conquista del Nuevo México. Documentos del Archivo general de Indias (Sevilla)*. Sevilla: Imprenta de San Antonio, C. de San Buenaventura, 1915.
- Martínez Saldaña, Tomás, *La diáspora tlaxcalteca. Colonización agrícola del Norte mexicano*. México: Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1998 (2ª ed.).
- Matthew, Laura E. and Michel R. Oudijk, *Indian Conquistadors: Indigenous Allies in the Conquest of Mesoamerica*. Norman: University of Oklahoma Press, 2007.
- McEnroe, Sean F., *From Colony to Nationhood in Mexico: Laying the Foundations, 1560-1840*. New York: Cambridge University Press, 2014.
- Montejano y Aguiñaga, Rafael, “La evolución de los tlaxcaltecas en San Luis Potosí”, en *Constructores de la nación. La migración tlaxcalteca en el norte de la Nueva España*, María Isabel Monroy Castillo (presentación), s.l.: El Colegio de San Luis, Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1999, pp. 79-87.
- Morfi, F. Juan Agustín, *Relación geográfica e histórica de la provincia de Texas o Nuevas Filipinas: 1673-1779*. Ed. de Guadalupe Curiel Defossé, México: Consejo Nacional para la Cultura y las Artes (Cien de México), 2010.
- O’Gorman, Edmundo, *Historia de las divisiones territoriales de México*. México: Porrúa (Sepan cuántos..., Núm. 45), 1994.
- Palou, Fr. Francisco, “Relación histórica de la vida y apostólicas tareas del venerable padre Fray Junípero de Serra”, en *Historia de la Antigua o Baja California / Vida de Fray Junípero Serra y misiones de la California Septentrional*, estudios preliminares de

Miguel León-Portilla, México: Porrúa (“Sepan cuantos...”, 143), 2007.

Suárez, Thomas, *Early Mapping of Southeast Asia: The Epic Story of Seafarers, Adventures, and Cartographers Who Mapped the Regions between China and India*. Singapore: Periplus, 1999.

———, *Early Mapping of the Pacific: The Epic Story of Seafarers, Adventures, and Cartographers Who Mapped the Earth’s Greatest Ocean*. Singapore: Periplus, 2004.

(和文)

アンダーソン, ベネディクト『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』  
白石さや・白石隆訳, NTT 出版, 1997年。

池端雪浦「フィリピンにおける植民地支配とカトリシズム」桜井由躬雄編『岩波講座  
東南アジア史 4 : 東南アジア近世国家群の展開』, 岩波書店, 2001年, 217~242頁。

白石隆『海の帝国——アジアをどう考えるか』中公新書, 2000年。

寺見元恵「一九世紀のマニラ」斎藤照子編『岩波講座 東南アジア史 5 : 東南アジア世界  
の再編』, 岩波書店, 2001年, 321~348頁。

増田義郎『太平洋——開かれた海の歴史』集英社新書, 2004年。